

## 1930年代の帝国日本におけるモダニズムの諸様相 ——空間・メディア・植民地——

名古屋大学大学院文学研究科  
人文学専攻日本文化学専門 張ユリ

1930年代は日本にとって大きな転換期であったといえる。1930年代は、1923年にあった関東大震災からの復興を試みた時代であり、1929年に始まった世界大恐慌の影響が日本に襲いかかる中でも、都会を中心として消費社会が拡大されていき、近代都市文化が花咲いて「昭和モダニズム」として現れてきた時期である。一方、1931年の満州事変から始まった戦争は益々拡大していき、1933年の国際連盟脱退、1937年の支那事変、そして1938年の「国家総動員法」公布に至るまで、1930年代は帝国日本の終焉を招いたアジア・太平洋戦争に向かっていく時期でもあった。このようにモダン文化を象徴する自由さと国民国家によるファシズムが交差する1930年代を捉える際、一般的に1930年代前半をモダン文化の全盛期として説明することができるのであれば、1930年代後半は1940年代の戦時下体制に取りかかろうとした時期であったといえよう。ここに見られるように、1930年代前半と1930年代後半の間にはモダニズムと戦争という認識の隔たりが存在し、この隔たりは現在の言説においても引き継がれていると考えられる。

本論文では、1930年代における都市空間とメディア、植民地を軸にして、日本のモダニズムについて考察を行った。日本の1930年代は、「昭和モダニズム」に代表される消費と享楽を中心とした風潮が最盛期に達した前半期と世界を相手にする戦争に向かおうとしてファシズムが激化していった後半期に断絶された形で認識されてきたが、本論文は1930年代という時代が如何に捉えられるかを明らかにすることを目的とした。また、そのような断絶の中で風俗的な流行という側面のみが強調されて語られてきた1930年代前半を象徴するモダン文化及びモダニズムを再評価することをも試みた。

従来のモダンに関する研究の大半は文化論的・都市論的研究に留まっており、日本文学におけるモダニズムは生活様式の記号として捉えられてきたといえるが、本論文では1930年代におけるモダニズムの諸様相を見出すために、空間・メディア・植民地という側面から、帝国日本のモダン及びモダニズムを考察した。

まず、空間を一つの軸としたのは、1930年代のモダン文化の一つの様相として近代都市文化を挙げることができるということ以外にも、近代に入り、様々な作家や思想家たちが自分を取り囲んでいる空間に注目し、時代の中で変化していく空間の形や意味について考察を行ったことが、その理由として挙げられる。ジョイスの『ユリシーズ』やベンヤミンの『パサージュ論』のような試みがヨーロッパを中心として繰り広げられるなか、日本においても空間に関心を示す人々が増えていった。今和次郎が「考現学」という名のもとで「銀座街風俗」を発表した1925年以来、近代都市空間、とりわけ関東大震災後の東京は「モダニズム」の象徴として文学やジャーナリズムによって消費されるようになるということを踏まえて、本論文では1930年代のモダニズム文学における近代都市の空間表象及び作家の都市経験に注目して考察を行った。

次いで、メディアに関しては、1930年代は雑誌の創刊が盛んになった時期であり、創刊ラッシュと既存の婦人雑誌や『キング』などの大衆雑誌の人氣が相俟って雑誌ブームを起こ

すことになるが、その中で、タイトルに「モダン」を掲げてモダン文化を取り上げる雑誌群が登場する。本論文では、その雑誌群をメディアにおけるモダンの一つの集团的動きとして捉え、「モダン」系雑誌と命名した上で、「モダン」系雑誌、とりわけ『モダン日本』を研究対象にして、これまで注目されなかった 1930 年代の雑誌メディアにおけるモダン文化を明らかにすることを試みた。

最後に植民地という観点については、1930 年代におけるモダニズムを考察するに当たり、その対象を日本本土に限らず、日本文化の影響圏全体を想定するという意味で、植民地を含む帝国日本を研究対象とし、その中でも植民地朝鮮におけるモダニズムについて考察を行った。とりわけ、1930 年代における朝鮮文学者の東京経験と朝鮮モダニズム文学における都市空間表象に注目したが、そうすることによって、帝国と植民地の関係を従来のように文化の受容と変容という側面では捉えるのではなく、帝国のモダンの体験者としての植民地青年を想定して、その体験の前後の変化を追うことで、モダンが帝国という枠組みの中で如何に現れてくるのかを立体的に捉えようとした。

以上のような目論見を想定する本論文は三部で構成されている。日本のモダニズム文学に現れている都市空間表象を中心にして考察した第 1 部では、東京が近代都市として最も注目を浴びていた「帝都復興」の前後から、モダン都市東京を描く文学者たちが激減する 1930 年代半ば頃までを視野に入れたものである。考察の対象になる時期をそのように設定したのは、考察の目的がモダニズムを通じてモダン及び都市文化の实在を窺おうとすることではなく、1930 年代前半から後半に移りゆく過程を追究することにあつたためである。そして、第 2 部と第 3 部においても、第 1 部と同様にモダニズムの絶頂期から退潮までを視野に入れて考察を行った。

「帝都復興祭」が行われた 1930 年に刊行された『モダン TOKIO 円舞曲』は世界の各大都市をテーマにしている『世界大都会ジャズ文学』の第 1 巻として企画されたものであるが、その企画は震災後の「帝都復興」を宣言するものであるのみならず、世界の中に日本を位置づけようとした試みでもあつたといえよう。しかし、復興した帝都を讃美しているように思われた『モダン TOKIO 円舞曲』の中には、享樂的な都市文化が描かれていると同時に、機械文明・都市文明に対する批判も現れていた。第 1 章の考察で明らかになったことは次の 2 点である。一つは、浅草から銀座・新宿へ文化の中心が移動したことが、大衆が「見る行為」に代表される受動的な享受者から、「体験」を起こす主体に変化したことを示唆しているということであり、もう一つは、これまでビジネスの中心として語られてきた丸の内を 1930 年代の東京の中心として再評価することができたことである。

モダンの真髄を指す言葉が、西洋的なものを意味する「ハイカラ」から、新しさを意味する「尖端」に変わった 1930 年代において、上述したような大衆の有様の変化は、モダン文化を生成する主体が文化を牽引してきた文人及び芸術家から大衆に変わったことの象徴的な現れであるといえる。大衆がモダン文化の主体になるにつれて、文学者たちがモダン文化から離れる傾向が強く見られる。そのような動向の一つとしていえるのが、第 2 章で考察した堀辰雄文学における「東京離れ」である。

第 2 章では、「聖家族」の前後において異なる様相を見せている堀辰雄の文学について、東京を中心としてモダン文化に即したものを書いた初期作品から、「聖家族」以降の死と生の中に揺らぐ愛を描いた、いわゆる「軽井沢文学」への移行過程を、「東京離れ」と「第 3 の空間」の発見という観点から考察した。初期作品と「軽井沢文学」との間に明らかな隔たりが存在する中で、堀辰雄文学が一般に後者を意味するようになったのは、初期作品に対する作家自身の否定的な認識に起因すると考えられる。堀辰雄に「東京離れ」を決心させたのは、衰退した浅草の表象などを通じて表されているアメリカニズムに支配された都市の物質文明に対する批判だけではない。第 1 章と照らし合わせて考えると、芸術的志向の現れであつたモダンが享樂化・大衆化していくことに対する懐疑も、堀辰雄の転向に深く関わっているのである。ここに見られる大衆主体のモダンに対する否定的な認識は、「新興芸術派倶楽

部」結成当時に名前を挙げるも間もなくして離脱していった文学者たち——代表的には川端康成や小林秀雄など——に共通して現れるものであり、現在まで続いている世俗的な流行という1930年代のモダンにおける評価にも影響しているといえる。

第1部全体を通して1930年代のモダニズム文学について見えてくるのは、1920年代から30年代までにおけるモダン文化の意味変化には大衆の主体化が遂行されていたということである。そして文化の主体として台頭された大衆の存在が文学・芸術志向のモダニズムと1930年代のモダン文化の断絶を生じさせた一つの原因として浮き彫りになってくると考えられる。

このような状況の中で、大衆が主体となったモダン文化の拡張の一助となったのが「モダン」系雑誌、とりわけ『モダン日本』である。第2部では、『モダン日本』を中心にして、「モダン」系雑誌が如何に読者層を作り上げ、また読者に如何なる働きかけを見せていたかを、読者戦略と女性文学者の位置づけ、そして戦時下における編集体制を通じて考察した。第3章では、「モダン」系雑誌の代表格であり、最も大きな影響力を行使していた『モダン日本』の根底には読者の行動を誘導する方針が存在していたことを明らかにした。他の「モダン」系雑誌が都市文化を中心としたモダンを読者に伝えようとしたならば、『モダン日本』はブランド化された雑誌の商業化と、読者の組織化を通じて一つの文化圏として機能することで、雑誌内容におけるモダンより読者が行動を通じて経験できるというモダンの形態を確立したのである。

第4章においては、『モダン日本』をはじめとする「モダン」系雑誌に現れている1930年代の女性像と女性文学者の位置づけについて考察を行った。自立的で進取的な女性を意味したモダンガールという概念は、1930年代の大衆的なモダンが流行すると共に、「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」と結合して女性の欲望を刺激する様子を見せるようになる。そしてこの「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」は、「モダン」系雑誌における女性文学者たちを分析するに重要なキーワードとして現れてくる。女性文学者たちが「モダン」系雑誌に登場する頻度の多さと、掲載されている作品の少なさが見せる克明な対比は、女性文学者が「モダン」系雑誌において、その作品によって消費されるのではなく、「文学者」という女性の一類型として消費されていたことを明らかにしている。「モダン」系雑誌の中に見られる女性文学者たちが描く作品は主に「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」に依拠しているものが多いといえるが、特にそのような動向は銃後の女性を描く作品において明確に現れている。「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」という女性の欲望を刺激する装置を通じてモダンガールと銃後の女性は繋がっており、それを導き出す役割を女性文学者が果たしていたのである。

『モダン日本』は消費から文化生活、旅行、競馬などに至るまで、様々な方面において読者に行動するよう促していたことが第3章の考察によって明らかになったが、そのような体制は戦時下においても貫かれていた。第5章で考察しているように、『モダン日本』は見えない戦地を可視化し、戦地にいる兵士たちの存在を浮き彫りにする方法で戦地への慰問を奨励し、また銃後における女性の役割を強調することで、読者に戦争を支える存在として振舞うよう促していたのである。戦時下の『モダン日本』は、戦争を支援する体制と共に、日本の植民地政策に動員されていた。『モダン日本』の臨時増刊号である『モダン日本 朝鮮版』が朝鮮を知らせたいという編集長馬海松の意図の基で企画され、朝鮮について詳しく紹介することで、1930年代後半から1940年代初めの「朝鮮ブーム」に寄与した点は認められる。しかし、『モダン日本 朝鮮版』が「内地」の国民に朝鮮を帝国日本の一員として承認するように促すことを前提としており、近代的で自律的な朝鮮・朝鮮人像を浮かび上がらせることで朝鮮における自発的な「内鮮一体」を強調していることによって、日本の帝国主義に協力していたことは否定できないと考えられる。

第2部において重点的に考察した『モダン日本』が、「モダン」系雑誌の中において大衆雑誌として圧倒的に支持されたことには、読者に行動を促す仕組みを成功的に作り上げたと

いう点を挙げるができる。しかも、モダンを構築したその方法を保持したまま、ファシズムに方向転換したことは、モダンからファシズムへの移行という観点から 1930 年代を捉えようとする際に一つの視座を提供していると考えられる。また、第 5 章の考察からも窺えるように、1930 年代の文化において帝国日本という枠組みの中で植民地が如何に捉えられるかという問題は、日本から植民地への影響のみならず、「内地」で繰り広げられた植民地のイメージ形成とその受容の仕方という側面においても考慮されるべきであろう。

しかし、本論文においては、そのような両方向性における宗主国と植民地の影響関係形成に注目するより、1930 年代の植民地におけるモダニズムについて、植民地青年の個人としての都市空間経験を中心に考察する目論見を立てた。それは、モダン文化とモダニズムの形成において都市経験が欠かせないものであることと、朝鮮において、日本とりわけ東京が近代を象徴するものであると同時に、植民地青年に近代に対する挫折と幻滅を味わわせた場所であったということ念頭に置いたものであった。第 3 部では、植民地朝鮮の青年における東京経験を中心に、植民地青年におけるモダニズムを浮かび上がらせようとした。

第 6 章では、日本のモダニズム文学と朝鮮のモダニズム文学における都市空間の意味とその異なりについて究明するために、朴泰遠の「小説家仇甫氏の一日」と堀辰雄の「不器用な天使」を遊歩者という観点から比較分析した。「不器用な天使」の「私」が東京という都市空間を内面化して意識上の空間として再構成しているのに対し、「仇甫」における京城は様々な境界が存在する空間として描かれている。遊歩という行為は都市空間の中で行われる自己認識の行為としても解釈できるが、「私」は東京を完全な私的領域とした上で自己認識を試みていた。一方、「仇甫」は東京と京城の間に存在する時間的・意識的遅れを意味する「時差」によって生じた京城における様々な境界を克服することができずに、京城という都市空間を私的領域として認識することにも、その中で自己を認識することにも失敗している。植民地青年の東京経験に付随しているこの「時差」は、植民地が宗主国に抱いている憧憬と、その裏にある自らの限界の自覚として現れている。

第 7 章は、留学ではなく個人として東京を経験している二人の文学者、林和と李箱を取り上げて、彼らの東京経験から植民地青年における東京の意味について考察したものである。林和と李箱の東京経験は、植民地青年が東京を如何に認識したのかについて、対照的な様相を呈している。階級運動の場として東京を経験した林和は、時間が経つにつれて、東京を理念が実現する理想化された空間として意識するようになる。それに比べ、近代への憧憬を抱いて東京に向かった李箱は、東京の近代が模造に過ぎないということに気づくと同時に、機械文明化された都市に対する「幻滅」を感じる。林和と李箱は、二人とも朝鮮で行き詰まりを感じ、理想を持って東京に向かったという点においては共通しているが、二人は東京に対する認識は異なっている。

その認識の異なりに関わってくるのが第 6 章で考察した「時差」であるが、「時差」は宗主国に対する植民地の遅れを意味するが、個人の経験を想定して説明すれば、植民地における原体験とその後に追行される宗主国での経験が衝突することで感じる混乱や違和感を表す。林和の場合は、原体験から追行された経験への移行が朝鮮で経験した思想における挫折を克服する方向で進行されており、東京で追行された経験は思想的な発展をなすことや、階級運動に専念することで位置づけられるといえる。すなわち、林和において、原体験が無化された後に、東京での経験が進行されており、両者の衝突である「時差」は現れなかったのである。しかし、李箱の場合は、原体験——京城における遊歩者としての行動様式——を自分のアイデンティティとして保持したまま、機械文明に支配されている東京を経験することによって、誰よりも強く「時差」を感じ、それが「幻滅」に繋がっているのである。

第 8 章で考察した馬海松の場合は、これまで見てきた朴泰遠や、林和、そして李箱の東京経験とは様相が異なっているといえる。16 歳で初めて渡日した馬海松には、東京経験の中で京城との間に存在する「時差」を感じるができなかった。馬海松における都市空間やモダンについては、東京が原体験として存在し、京城での経験が後を追うという、一般的な

植民地青年とは順序が逆転しているからである。そして、その逆転した原体験と追行された経験との間に存在する「時差」は、馬海松においては、1945年に朝鮮に戻って京城で生活を始めてから、朝鮮の後進国性を指摘することで現れるようになる。

馬海松は、『モダン日本』の編集長時代にはモダン文化を牽引しながら自由主義者として行動していたが、朝鮮に戻って以来、朝鮮戦争を経験することで強力な国家主義者の姿を見せるようになる。第8章では、馬海松におけるこのような変貌の裏には、「敵」と「生存への脅威」を認識する行為が現れているということについて考察した。第3章、第5章、第8章に現れている馬海松の行跡を繋げてみると、モダニズムからファシズムへ、そこからまた国家主義者に変化するモダニストの姿が見えてくる。馬海松のこのような転身は1930年代における時代の変遷と同様の様相を見せているといえる。しかし、馬海松が国家主義者になったのは1950年代の朝鮮戦争の時であり、ここにも日本と朝鮮の間に存在する「時差」が見られるのである。

馬海松は帝国日本を自分を取り巻いている国家体制として認めた上で国家に協力していたが、それが国家主義には繋がらなかった。馬海松は強力な「敵」を認識することによって、国家というものを単純な管理体制としてではなく、「敵」に対抗するという一つの精神的な志向を共有する共同体として認識するようになり、そこから彼の国家主義が発現するのである。1930年代後半から国家を強力な精神的共同体として認識し始める「内地」の人たちに対し、「外地」の朝鮮青年たちが同様の意味で国家を捉えるようになるのは1940年代後半の朝鮮半島においてイデオロギー対立が激化していく時期からであるといえる。すなわち、馬海松の転身に見られる「時差」は国家に対する認識の遅れから生じているのである。

第3部を通して窺えることは、植民地朝鮮の青年における東京経験は植民地と宗主国の「時差」が密接に関わっているということである。植民地青年としての原体験は、李箱の遊歩者としてのアイデンティティがそうであるように、必ずしも民族的アイデンティティなどのイデオロギーに関係するものではなかった。一個人が積んできた経験において見られる「時差」という隔たりは、同時代に存在するも同時代を生きることはできなかった植民地と宗主国の間隙である。その「時差」を経験した朝鮮の青年たちは、時間という物理的に克服不可能な問題の前で、帝国の中での自らの位置と限界を確認するのである。